

演題:転倒・転落防止の取り組み～転倒カンファレンスを活用して～

演者:松谷真悟

<はじめに>転倒予防策を検討するために2017年6月より転倒カンファレンスを導入したが、少ないながら転倒は発生しており、さらなる転倒件数減少を目指す取り組みをカンファレンスを通して行ったので報告する。

<方法>転倒カンファレンスは毎週2回、病棟看護師とリハビリスタッフで行い、転倒事例とその対応をカンファレンス議事録から集計した。

<結果>転倒患者の多くはJCS I 桁で見当識障害のある重度の麻痺を認めない歩行可能な患者であった。初期の転倒要因は離床感知センサーを患者へ取り付け忘れる等の決定事項が守られていない場合が多かった。その後は患者の動きが早く離床感知センサーが作動した時点で対応が間に合わなかった事による転倒であった。カンファレンスではJCS I 桁、谷川式簡易知能評価スケール（以下HDS-R）が10点以下、過信発言・単独行動を認める、ADLが拡大傾向にある場合は離床感知センサーを継続し、HDS-Rが25点以上、診療の指示が通じ単独行動がない患者は離床感知センサー解除の検討を行った。

センサーが早期に作動しやすくするために患者に装着する位置やその間の紐の長さ、センサーの位置を工夫し、トイレやリハビリ等で一度センサーを外した場合は帰宅時の作動確認を周知徹底した。夜間せん妄を認める場合にはシャワー浴や車椅子での離床時間を増やし、尿意にて単独行動を認める時には時間を決めてトイレ誘導を行い単独での歩行を少なくなるようにした。

<考察>転倒カンファレンスを継続し予防策を検討したこと事で転倒予防の意識付けが行え、身体拘束・離床感知センサーの追加に頼るのではなく転倒が減ったのではないかと考える。

<結論>転倒カンファレンスを行うことは転倒予防策を検討する意識付けになり転倒減少につながる。